COTO TSUSHIN

発行／滋賀医科大学同窓会湖医会
〒520-2192 大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内
TEL 077-548-2074, FAX 077-548-2094
E-mail:koikai@koikai.org

湖都通信 39号

Since 1987, Editer Takehiro Inui,
Co-editor Takashi Kadowaki,
Tetsunobu Yamane
印刷／昌栄印刷 2002.7.25

第2回 看護学科交流会開催

卒業生10名が参加、貴重なアドバイスを

看護学科 助教授
豊田 久美子

去る6月22日(土)、第2回看護学科卒業生と在校生の交流懇談会が、湖医会白石副会長、卒業生10人の方々のご出席を得て、1～4回生の在校生83人が参加し開催されました。これは、昨年開催された交流会を6期生(4回生)が主体となって企画・運営して継承したものです。「保健医療福祉の現場で活躍されている諸先輩方の生の声を直接お聞きしたい!」「進路に向けて具体的なアドバイスをいただきたい!」という在校生の願いを、湖医会と看護学科後援会から様々なサポートをいただいて実現しました。

また、今年は卒業生全員の方にこの企画への参加のご依頼と共に、在校生の進路に対する指針を得るためのアンケート調査をさせていただきました。ご多忙中にもかかわらず多くの方のご回答を得、その一次調査は交流懇談会のなかで学生がまとめて在校生に紹介されました。「看護の現場は厳しいなかにも、やりがいが!」「町の人々の健康を高める仕事が楽しい」「就職先探しは“ピンとくるもの”を大切に!」といった生きた先輩のメッセージを受けて、在校生の目は授業中の100倍の真剣さ。1期生から9期生まで一つ一つの真珠が繋がってきらきら輝いた瞬間でした。

会誌「湖醫會」第5号（創立20周年記念号） 発行

第1回 滋賀医科大学・龍谷大学交流シンポジウム

総合診療部 教授
三ツ浪 健一

平成14年1月18日、滋賀県の立会のもとに、滋賀医科大学と龍谷大学は「学術研究・教育・実践の交流に関する協定」を締結し、滋賀県における保健・医療・看護・福祉の連携を促進し、関連人材の総合的で学際的な育成を目指すことになりました。

この趣旨に基づき、5月18日に子ども・高齢者・家族を結ぶ医療・看護・福祉の接点「痴呆高齢者の心・身体・暮らしを支える」をテーマとする第1回交流シンポジウムが龍谷大学瀬田学舎で行われました。

吉川隆一・上山大峻両学長の開会挨拶、國松善次滋賀県知事の記念メッセージのあと、太田義弘氏と私の司会進行で、宮川正治氏(医療)、大町弥生氏(看護)、長上深雪氏(福祉)の3人のシンポジストと高田佐介氏(行政)、深尾宗一氏(家族)の2人のコメンテイターの意見が述べられました。その後、一般市民を含めて、200人を越える聴衆を交えての熱心な討論が行われ、種々の立場のものが一堂に会することから新しい展開が始まり得る予感を感じさせるシンポジウムとなりました。

主な記事

私の研究……2
開業医……3
同期会
卒後10年・20年……4～5
おしらせ……6
看護学科交流会……7
教授就任にあたり
ドキュメント風 教授選考報告……8～9
LITTLE WINDOW……10

私の研究

研究者人生

多くの仲間と、研究に夢とロマンを追求しています

滋賀医科大学　解剖学第１講座
助教授　**藤宮 峯子**（医・１期生）

基礎医学の研究者として歩み始めたのは31歳の時でした。卒後２～３年は消化器内科医としてのトレーニングを積み、それに続く４年間は大学院生として過ごしました。大学院時代は指導教官に言われるまま、わけも解らずひたすら走っていました。そして大学院卒業と同時に解剖学の助手になった時、中枢神経を専門とする指導教官から独立して、消化管ホルモンを研究テーマに選びました。神経より内分泌に興味があったのは、神経がデジタル的に働くのに対し、ホルモンはアナログ的に働き、東洋医学的に全身の機能を整えながら病気を治すという考え方にぴったりと当てはまったからです。当時は解剖学者としてエレガントで美しい形態学の仕事をしたいと考えていました。

それ以来15年間、よくここまで来れたものと感慨ひとしおです。その間、一度も自分の研究に自信を失ったこともなければ、職を変えたいと思ったこともありません。毎日毎日が楽しくて、次に起こることに胸を躍らせ、多くの研究仲間達と面白おかしくやって来れたと思います。これはおそらく、私がノーテンキであることと、多くのすばらしい出会いがあったからだと思います。実際、一つ一つの仕事が、あの時あの人との出会いがあったからこそ成し得たと言えるものばかりなのです。一般に基礎医学の研究者と言うと、マニアックで独善的で一体何が楽しくて安い給料で働くのか知らん---と臨床に進んだ卒業生から半ば同情の目で見られる事が多いのですが、一旦足を踏み込むとすごい世界が待っているのです。その魅力を一言で言えば、自分の知力、体力を総動員して世界初の仕事にチャレンジする、つまり勝とうが負けようが世界を相手に体を張って闘い続ける日々の興奮こそが研究者の醍醐味だと思います。実験室にこもって地味な生活をしているように思われがちですが、実際はコンピューター通信で世界中の研究者と情報交換が出来、実験サンプルはFedEx便で48時間以内に世界中のあらゆる研究室に届きます。ただ、地味にやろうが派手にやろうが給料が同じなところが玉に傷ですが。現在の研究テーマは、膵β細胞の再生、脳腸相関、腸管免疫の３本柱です。β細胞の再生と糖尿病の遺伝子治療は今一番力を入れている研究で、これまで腸管の幹細胞にPdx-1遺伝子を導入して、in vitroでβ細胞を作ることが出来ました。本学内科学講座(旧第３内科)の柏木先生のグループとの共同研究です。最近はヒューストンのベーラー大学に留学している内科学講座(旧第３内科)の小島秀人先生、Lawrence Chan教授と共同研究をおこなっています。糖尿病の遺伝子治療を施したマウスの腹部臓器が続々と送られて来て、in vivoで遺伝子投与をした動物のどこでβ細胞が再生してくるのか、他の膵島ホルモン産生細胞との住みわけはどうか、また細胞がどの程度成熟しているのかを免疫電顕的に調べるのが私の仕事です。β細胞の再生は国内外で競争相手が多く、日本では旧帝大が金にものを言わせてがんがんやっている分野なのですが、滋賀医大チームはアプローチの独自性から勝算があるのです。それは大抵の再生医学の研究者は、分子生物学やゲノム医学の専門家で、目的のホルモンがRT-PCRやNorthern Blotで引っ掛かってくれば、めでたしめでたしと考える人達です。しかし、未分化なインスリン産生細胞ではなく、血糖値に応じてインスリン放出をセルフコントロールできる成熟型のβ細胞が出来たかどうかを分子生物学や生化学的に判断するのは難しいのですが、電顕を見れば一発にわかります。分子生物学や遺伝子工学の進歩の影に忘れ去られたかに見える電子顕微鏡や免疫電顕のテクニックがここに来て最先端の医学を支えることができるのです。特にアメリカでは解剖学教室が分子生物学教室にとってかわった途端に電顕の技術を持った人が姿を消したようです。敵の弱点を知ること、これが勝利への第一歩です。

脳腸相関の研究では、本学外科の藤村昌樹先生のチームが無麻酔ラットの消化管運動の研究で多くの実績を挙げてくれました。これまで消化管運動の測定はイヌなどの大動物でのみ可能と考えられて来たのを、外科医の驚異的な手術手技のお蔭で無麻酔のラットで実にきれいな運動波形を出すことが出来、その成果を2000年に世界で初めて発表することが出来ました。また、摂食行動に関わる脳腸相関の研究では、神戸大学の内科、腸管免疫の研究では九州大学や東海大学と言うように、いつも誰かと組んで研究して来たというのが私のやり方です。

多くの人と一緒に歩いているから、行き詰まることもないし、発想も次々と湧いてくる。というより画期的な仕事は常に外部からもたらされてきたという方が正しいかも知れません。多くの仲間と一緒に、研究に夢とロマンを追求できる人生は実にブラボーです。

開業医

滋賀医大近畿同門会を開催して

医療法人横尾皮膚科医院
理事長　横尾　正
（医・1期生）

今日、滋賀医大卒後20周年記念パーティーに参加しました。初代学長の脇坂先生、初代副学長の佐野先生、解剖の前田先生、薬理の戸田先生、化学の今村先生、地理の井戸先生、旧第2内科の細田先生に御臨席賜り、久々に貴重な御言葉をいただきました。私自身が当時の先生方の年齢とほぼ同じ位になっていると指摘され、考えさせられるものがありました。同級生も、話し方や特徴こそほとんど変わらないものの、生物学的な老化だけは、うっすらとベールのように全員を覆っているのが感じられました（私も少し変わりました）。同じように勉強し、テストを乗りこえ、医師国家試験に合格しても、それぞれ進んできた道のりや目標はさまざまであり、これからの人生もまた、当然の事ながら違ったものになっていくのでしょう。

さて、私は15年前の6月に、奈良県北葛城郡王寺町で開業しましたが、しばらくは、同じ奈良県で開業する同窓生はなく、孤軍奮闘の状態でしたが、約5年前より、同級生の藤井載樹先生（整形外科）、蜂須賀正孝先生（内科）、石井新先生（産婦人科）の3人が次々と奈良県（郡山市が2人、奈良市が1人）で開業され、着々と地盤を築いておられます。それ以来、時々4人で会食をし、いろいろと情報交換をしていますが、どうせなら近くの県（大阪・京都・和歌山）で開業している同窓生もいっしょに集まる機会を作ろうではないかという事になり、2000年の年末に第1回滋賀医大近畿同門会を大阪で開催しました。あまり堅苦しい会ではなく、友達の輪を少し大きくしたようなものであり、会則や年会費もありません。気楽な会ですので、後輩の卒業生もどうぞ御参加下さい！

その後の活動といえば、昨年春に、三重県の島ヶ原CCで親睦ゴルフコンペを開催したのと、昨年末に大阪のエスカイヤクラブ難波店で第2回同門会を開催したことです。その際、せめてこれだけはということで、以下のごとく役職を決めました。（会長：横尾正、副会長：蜂須賀正孝、奈良支部長：藤井載樹、大阪支部長：秋野一夫、京都支部長：辻一弥、和歌山支部長：山崎正昭）この日は、12名の参加があり、それぞれ自己紹介をしたあと、診療上の悩みや問題点、スタッフに関すること、経営状況、税務問題、資産運用等、学会や地元の医師会の集まりでは聞けない事を本音で話し合いました。滋賀医大は、まだ歴史が浅く、開業医の数も多くありませんが、将来はすべての県でこの様な会が発足することを祈っています。

前列中央が筆者

ところで世の中には、同窓会、医師会、自治会、学会、研究会、後援会、趣味の会、親睦会、歓迎会、送別会、新年会、忘年会・・・実にさまざまな会があります。私は大学時代から、いくつかのクラブに所属し、また卒業後もなるべくいろいろな会に出席し、活動しています。その結果、さまざまな人々と顔見知りになり、あるいは友人となって、患者さんを紹介していただいたり、それぞれの道の達人を教えてもらったり、いろいろな事の相談にのってもらったりしています。新しく開業される先生方も、ぜひ多くの会に参加して交流の輪を広げていただきたいと思います。駅やバスターミナル、ハローページの広告を見て来院される患者さんよりも、近隣のドクターや友人、知人から紹介されて訪れる患者さんのほうが、スムーズに会話が進み、良好な信頼関係が築かれるのではないでしょうか。そういうある種のつながりから始まる医師・患者関係は、自ずと打ちとけたものになり、ひいては医療訴訟に発展しかねない小さなトラブルを未然に防ぐものでありましょう。

私は来院した患者さんには、常に笑顔で接していますが、特に気難しそうな人には、ジョークを飛ばし、笑って帰ってもらうことにしています。

◆
◆

この会に入会を希望される方は、前述の会長・副会長・各支部長または湖医会事務局にご連絡ください。

卒後20年 1期生

1期生たちの遺したもの

名誉教授　佐野　利勝

昨年の冬、短期間に三度も肺炎をわずらい、三度目には有無を言わさず入院させられた。御医者から偉そうな態度で接せられると実に不愉快なものだが、主治医は毎朝「おはようございます。」と言って病室にはいる、礼儀正しいよい青年で、平成十年に滋賀医大を卒業したとのことであった。「そうか。実は僕も滋賀医大卒だ」と言って笑った。

私の教え子で、今では有名になっている或る京都の医師から「滋賀医大の出身者は親切で態度もよく、大丈夫だというのはわれわれのあいだで定評になっている」と聞いて嬉しかった。滋賀医大は伝統ともいえる一種のカラーを作り上げたようだ。そこに1期生たちが果した役割が大きかったことは確かである。去る2月23日の同期会に集まった懐かしい諸君を眺めて、よい学生たちに恵まれたのは教師冥利につきることだと感謝している。

タイムスリップ

愛甲医院　迫田　悟

40歳台も残すところあと僅かになり、自分と同世代の患者さんを、高血圧症や高脂血症などの病名で診察するようになりました。一週間、いやひと月のたつのが早いこと、環境の変化で地球の自転が早くなっているのではないか、と感ずるこのごろです。ときどき、患者さんが同窓会のことを話題にされることがあります。年をとると、同窓会が楽しみのひとつになるのだなと思っていました。そんな矢先、同期会の案内状が届き、自分も同窓会なるものに出席し、タイムスリップしてみることにしました。鹿児島空港まで、狭い山道を走ること1時間30分。定刻時に離陸、16時40分伊丹に着陸。17時25分新大阪発の新快速に乗り、18時すぎ、やっとのことで、同期会が開かれる琵琶湖ホテルに到着しました。ホテルの玄関で、幹事の高橋先生のお出迎え。ロビーに入るやいなや、そこには、20年ぶりの懐かしい世界が待っていました。

恒例の記念撮影。初代副学長の佐野利勝名誉教授、担任だった井戸名誉教授・今村名誉教授・前田名誉教授・戸田名誉教授・細田名誉教授のご挨拶のあと、テーブルを囲んで、近況や昔話に花を咲かせました。会の途中、初代学長の脇坂名誉教授も到着されました。80歳をこえられた今でも、オーケストラで演奏されている先生のお姿をビデオで見せていただき、感銘を受けました。

配布された名簿で現在の肩書き・役職を知り、びっくりしました。みなさん、偉くなられているのだな、と。トップにまで登りつめた山口大学教授の藤宮龍也先生、富山医科薬科大学教授の笹原先生には、余裕と自信が感じられ、そして教授職としての仕事の多さのため、肝心な研究ができないという悩みを知りました。持ち前のバイタリティーで、ますますがんばって欲しいと思います。次のゴールまであと一息の、大阪大学助教授の小杉先生、滋賀医科大学助教授の藤宮峯子先生には、直接には何もお手伝いできませんが、エールだけでも送ってあげたい、と心から思いました。

20年という歳月の隔たりは、向き合って話し出せば一度に吹き飛んでしまいます。このままもっと、もっと話をしていたいと思っているうちに、時間となり同期会は散会となりました。きっと同期会に出席した35名、全員がそのように思われたことと思います。名残り惜しい気もしますが、お互いの再会を期して、明日からの仕事のため、大津をあとにしました。

新大阪までの新快速の車中で、走れど、走れど、家並みがとぎれることのない、窓の外の風景をみながら、ため息が出ました。いつも見ている電車からの風景は、走れど、走れど、山ばかりなのです。そして、同級生のみなさんと比べて、一日に診察する患者さんの絶対数にずいぶん差があることが、気になり出しました。すこし言い訳になりますが、帰宅後、出入りの問屋さんに協力してもらって、本院のまわりにどれだけ医科の診療所・病院があるか、数えてもらいました。なんと、半径600mで12、半径1kmで37、半径5kmで57でした。4月に、また、循環器と脳外科・内科の二つの診療所が新規にできました。ご参考までに、ここ、鹿児島県川内(せんだい)市の人口は、7万4千人です。

まだ同期会に出席したことがないという卒業生の方も、次に案内状が届いた時はぜひ、出席にまる印をつけてください。出席すれば、きっと何か得られるものがあるはずです。そして、懐かしい誰かが、出席されるのを心待ちにしていると思います。これから開催される各学年ごとの同期会が、ますます盛大になるよう願っています。そして、わが滋賀医科大学が行政改革の大嵐を無事に乗り切れるように、日本列島の片隅から祈っています。

20年前へのタイムトラベルに参加して

石川県健康福祉部健康推進課　沼田　直子

臨床、留学、出産・・・駆け抜けるような20年。卒後20年の同期会の通知を最初見ても動かなかった気持ちが、「行かなくちゃ」に変わったのはなぜ。大津駅に降り立って、ゆっくり琵琶湖ホテルまで歩きながら、今の自分がどんどん心細くてちっぽけな存在に感じていた頃に戻っていく。これなんだ、私は随分変わったのよと怒涛の青春時代を過ごした人に見てもらいたい、そして改めて20年かかってようやく恥ずかしくて対面できなかったあの頃の自分に向き合える自分がいる。随分色々思い込んできた同期会はあっけないほどの幕開けにはじまり、あまり感傷に耽る暇もないほどに過ぎてしまった。でも20年ぶりの人が大半なのに、皆誰だかすぐわかってしまう。皆それぞれの20年を背後に背負っているはずなのに、目の前にするのは20年前の学生時代の姿。時間の流れを一気に逆行するようにスポッとタイムスリップしてしまった。「人ごみに流されて変わっていく私を――あなたは私の青春そのもの」松任谷由実の歌が心に流れる思い出が持てる幸せ、同期会ありがとう。

同期会

卒後10年11期生

第11期生の同期会に出席して

名誉教授　土井田　幸郎

2月23日、第11期生の卒後10周年の同窓会に招いてもらい、喜んで出席しました。

10年振りに再会した面々が、入学当時の顔写真の前で、それぞれの、この10年を語ってくれました。元気よく10年を一筋に歩んだ人、幅を拡げるために、少し脇道を歩んでみた人、脇道が面白くなってそちらに進んだ人。それぞれの10年でした。全員が講義や実習で接していたときと同じ様に、元気で、純粋で、気概に溢れて、それぞれの道を歩いている姿が判り頼もしく思われました。

「10年後、また会いましょう」の言葉を最後に散会しましたが、皆が、どんな次の10年を過ごすのでしょう。

その間も個々に交友を深めながら、成長して行ってください。今回これなかった人も含め、次の会にはぜひ元気な顔を見せてください。

私も幸い元気なので10年後の会にまた出席させてもらえたらいいなと思いながら帰路につきました。

卒後10年の思い

杉原医院　杉原　伸夫

昨年9月に西宮市で開業（内科）しました。勤務医をしていた頃とは違い医療の内容のこと以外に時間をとられることが多々あり、個人営業（?）もたいへんだと実感しています。そんな折り、卒後10年の同期会の案内が届きました。出席する気持ちと時間のゆとりがあるのかという不安もあり、迷いましたが、出席してみますと、同期生が第一線で医療を担って活躍していることを実感でき、日々の意識をはなれてまた一段と元気がでてきました。佐野先生、土井田先生、戸田先生のお元気な顔も拝見でき、一人一人の近況報告では、大学入学時の写真も出て、ひととき学生の頃に戻ったような気分を味わうことができました。大学に入学した4月に生まれ、クラスでお祝いをいただいた長男もこの4月で高校2年生になりました。時の流れの早さにただ驚くばかりです。これからも地域の医療に貢献できるよう微力を尽くしたいと思いつつ、次回の同期会を楽しみにしています。

自分に出会えた日

高岡クリニック　高岡　秀人

平成14年2月23日11期生の卒後10年同期会が開催されました。40名程度の参加でしたが、卒後初めて顔を合わせる同期生も多く、楽しいひと時を過ごすことができました。開会前、あいにく参加できなかった旧友達からの便り等を見ながら雑談をしていましたが、皆久しぶりに会ったとは思えない雰囲気で、一気に学生時代に戻ったような気分でした。

開会後、御来賓の佐野先生、土井田先生から御挨拶を頂き、宴もたけなわ、恒例という事で入学当時のスライド写真を横に、各自順番に卒後の経過や近況を報告しました。しかし、ここで映し出された写真には驚かされました。それまでほとんど変わっていないと感じていた旧友達なのですが、写真と実物が随分違うのです（程度に個人差はありましたが）。人のことばかり言えず、私自身も。

確かに、思い返してみると入学当時の私は外科医志望でした。それが学生時代に人の心と体を合わせて診ていきたい等と欲張った考えを抱いたことで、卒後精神科で研修した後、身体各科をまわり（この頃、人にお前は何科かと問われると、困って、大阪では精神科医、新潟では内科医と思われている様です等と答えていました）、昨年10月、心療内科・精神神経科クリニックを開業しました。現在診療所ではストレス関連疾患が多く、やや心に比重がかかっています。できれば、やはり心と体について考えながら診ていきたいと思っていますが、その実践となるとなかなか大変です。知識や技術もさることながら、患者ー医者関係や診療時のこちらの内的態度が変わるからです（景色を見ながら針穴に糸を通すように感じるのは私だけでしょうか）。同期会で旧友に会って、自分にも会ったような気がします。10年後にも、また出会いたいものだと思います。

最後になりましたが、忙しいなか幹事をしていただいた福留先生、石川先生ご苦労様でした。次回もよろしくお願いします。

おしらせ 4

1 第2回「湖医会賞」受賞候補者募集中！

昨年より始まった会員のための『湖医会賞』。これは、地道に活躍する会員を表彰することにより、会員の今後の活動への励みにしてもらおうと企画されたものです。第１回の受賞者は垰田氏（3期生）・井上氏（8期生）でした。只今第２回「湖医会賞」受賞候補者募集中です。同封の推薦書にて受賞候補者をご推薦ください。自薦・他薦を問いません。締切は11月15日（金）「湖医会」事務局必着です。学生さんもどしどし応募してください。

2 名簿資料ハガキ提出のお願い

今冬発行予定の会員名簿に関する資料ハガキを同封しています。ハガキにはすでに自宅住所・勤務先等印字してありますので、内容をご確認の上、8月末日までに必ずご返送ください。尚、返送なき場合は、ハガキの内容がそのまま名簿に掲載されますのでご了承ください。

3 「滋賀医科大学湖医会JCBカード」提携終了のお知らせ

（以下「湖医会JCBカード」という）

現在「湖医会JCBカード」をお持ちの方には予めご通知いたしましたが、「湖医会JCBカード」との提携が８月末日で終了します。これは「会員数が伸び悩んだのでうち切らせてほしい」というJCBからの申し出によるものです。

「湖医会VISAカード」は今まで通りですので、VISAへの切り替えをおすすめいたします。もちろん新規加入者も大歓迎です。詳しくは事務局にお問い合わせください。

♪初年度カード年会費は不要です（同窓会負担）／学生は同窓会費不要（お申し込みは同封の申込用紙をご利用ください）

♪ホテルの飲食、宿泊割引き　oneランク上のおいしさが楽しめそう!

♪本が安くなります

遠くからでも電話で注文OK

♪同窓会費も引落しで手間が省けます　名簿がすぐに届きます

4 これからの湖都通信

記念誌「湖醫會」はもうご覧になりましたか？その中の卒業生動向調査アンケートで「湖医会」にも多数ご要望をいただき、会員の皆様が様々な情報を必要とされていることが分かりました。今後も激動の滋賀医大の現状や各分野で活躍している会員もどしどし紹介していきたいと思います。

ネットワーク作りにつきましては、現在「関東支部会メーリングリスト」という会員なら誰でも参加できるメーリングリストが立ち上がっています。また、一定の条件を満たせばグループ単位（学年・地域など）でのメーリングリストの開設ができます（費用は湖医会が負担）。詳しくはホームページをご覧ください。最近５期生のメーリングリストを立ち上げましたので、近々運営されることでしょう。その時はまた、湖都通信やホームページでお知らせします。

これからもどしどし「私が知りたいこと」をお聞かせください。ＦＡＸ（077-548-2094）で送信される方は下記をご利用ください。（e-mailアドレス等、連絡先もご記入ください）

私が知りたいこと

（連絡先）

第2回 看護学科 卒業生と在校生の交流会

スタッフのみなさん
（中段右端が浅野さん、その下が宮島さん）

湖医会の呼びかけで、昨年はじめて行われた看護学科の「卒業生と在校生の交流会」が今年も６月22日に開催されました。実行委員11名が実習中にもかかわらず、何度も集まり企画・運営しました。結果は、卒業生にも在校生にも大好評でした。実行委員からは早くも「来年は私たちが話してあげたい」の声もでていました。卒業生と在校生の繋がりにたしかな手応を感じた一日でした。

湖医会副会長の白石さん
（1期生）も挨拶

第1部　卒業生のトーク
“先輩の話に真剣な表情”

第2部　交流会
“知りたいことが聞けました”

交流会を終えて

看護学科４年　**浅野 光江**

６月22日、今年で２回目となる「卒業生と在校生との交流懇談会」が開催されました。様々な分野でご活躍されている卒業生の方10名と１～４回生の在校生約80名が集まり、楽しく和やかな一時を過ごすことができました。

前半は、卒業生一人一人に、経験談や進路を決めるにあたってのアドバイスをしていただきました。そして後半は、卒業生の方々に職種ごとに分かれていただき、在校生が希望の方と直接話をして、質問や相談をさせていただきました。病院説明会では聞けそうにないことまでたくさん聞かせていただくことができ、とても参考になりました。

終了後の在校生へのアンケートでは、多くの人が「大変満足だった」と答えてくれたり、「よかったわ。大変やったやろ！？ありがとう。」と言ってくれて、準備を進めてきた私たちも満足感でいっぱいになりました。準備にあたって、ご助言、ご協力くださった先生方や職員の方々、ありがとうございました。

アンケート集計を終えて

看護学科４年　**宮島 美枝子**

今年で２回目ということで、昨年度行わなかった卒業生へのアンケートを実施させていただいた。見本にするものがなかったこともあり、アンケートの項目作りから悩んだ。集計をどのようにするかを考えずに大まかな項目のままアンケートを作り、最終的に集計の段階になって、どうまとめたらよいのかとても困ったのが本音である。私たち自身、実習期間中であり、集まる機会も少なくどうしても問題の共有化ができにくい状態であったため、負担の偏りがあったことは言うまでもない。

しかし、交流会に参加された皆さんから、感謝の言葉を見聴きさせていただき、私たちの苦労が無駄にならなかったこと、そしてそれ以上に皆さんの役に立てたことをとても嬉しく思っている。最後に、私自身もアンケート集計のやり方などとても勉強になった。この反省を活かして、今後も交流会をさらにいいものにしていって欲しいと思う。

交流会に参加して

滋賀医大病院　第２外科
豚座 里見（看・５期生）

今年も卒業生と在校生との交流会が催されるとの知らせを聞き、１年前のことを懐かしく思い出しました。

卒後さまざまな道でご活躍されている先輩方のお話を聞けたことは、具体的に自分の将来を考えるよいきっかけとなりました。看護師になって３ヶ月足らずの私でしたが、それでも後輩の役に立ちたいと考え、交流会に参加しました。

交流会は去年とは立場が全く逆だったため、たくさんの後輩達の前で話すのには緊張しましたが、とてもアットホームな雰囲気で楽しく過ごすことができました。２回生までもが参加していたと聞き、とても感心しました。少しでもこれからの事を考えるのに役立ってくれれば幸いです。また、今回交流会に参加できたことは私にとっても自分の歩んでいる道について考える良い機会となりました。参加できてとても良かったと思います。

最後に滋賀医科大学看護学科のますますの発展と後輩達の活躍を祈っています。

近江八幡市立市民保健センター
松山　直美（看・１期生）

今回、西島先生から声をかけていただき交流会に参加することになりました。

軽い気持ちで引き受けたものの、当日いざ会場に入ってみると在校生のみなさんの真剣な眼差しに圧倒されてしまい、在校生の皆さんが聞きたいと思っていることに応えるだけのことが話せるだろうかと正直困ってしまいました。緊張した中で、話しだしましたが自分自身、在学中進路についてはかなり迷い、悩んだ事もありその話をしているうちに在校生の皆さんが同感してくれているのを見て緊張がほぐれました。保健師として働きだし４年目となりましたが、日々慌ただしく働き、仕事の楽しさを見失いつつありましたが、在校生の皆さんの前で自分の仕事の話をしていて、仕事の楽しさを再確認出来ました。

残念ながら私は１期生だったためこのような機会に恵まれませんでしたが、進路については誰もが悩むことです。今後も卒業生として在校生のサポートが出来たらなと思います。

ドキュメント風

教授選考報告

滋賀医大附属病院　医療情報部
教授　永田　啓（2期生）

2期生の永田 啓（さとる）です。2月1日付けで、滋賀医科大学附属病院医療情報部の教授になりました。医療情報部というのは、薬剤部や放射線部・検査部などといっしょで附属病院の中央部門のひとつです。病院のコンピュータ・ネットワーク・医療情報全般を担当しています。それに加えてインターネットなどを介した外部に対する情報発信や情報収集と分析など、要求される守備範囲は時代とともにどんどん広くなっています。卒業アルバムにも「コンピュータのことならおまかせ」と書きましたが、まわりからは「好きこそものの…」とか「好きなことをやってそれで教授になれたのは信じられない」とか「芸が身を助けたね」などと言われています。前号の湖都通信で、「抱負は次回に」ということでしたが、仰々しいのはいやですので、いつも心においている言葉をひとことだけ。「医療に明るさとわかりやすさを」。それでは、最近の教授選考がどんなものか、をちょっとご紹介したいと思います。

▼まずは「講座等あり方検討委員会」が作られます

長年の概算要求の結果、滋賀医科大学に医療情報部が正式に認められたのが2001年の4月でした。ポジションは教官2名。その内訳は、教授1・助教授1だけです。たいていの国立大学の医療情報部は教授1・助教授1ですから、滋賀医大も横並びというわけです。医療情報システムの研究開発では、早くからがんばっていた滋賀医大ですが、医療情報部が認められたのは全国で最後になりました。

これに先だって、2000年の10月から野田産婦人科教授が学内措置の医療情報部の部長に就任され、僕は眼科の講師をやりながら副部長をさせてもらっていました。4月になってからも、その体制で医療情報部の運営が続いていましたが、いよいよ専任の教授を決めることになり、まず「あり方検討委員会」が作られました。医療情報部は新しくできたポジションですから、そこに何をさせるかということをまず決める委員会が立ち上がったわけです。

このように、最近の教授選考は、昔とだいぶ様子が変わっています。

▼次は「教授選考委員会」です

「あり方検討委員会」で方針が決まったので、次に「医療情報部教授選考委員会」が作られました。「あり方検討委員会」や「選考委員会」は教授が中心ですが、助講会（助教授・講師の会）と助手会から2名ずつの委員が加わります。最近では、こうした助講会や助手会の委員の発言がかなり重視されますから、昔に比べると随分、風通しがよくなっています。教官の選考は事務の人に手伝ってもらうわけにはいきませんから、選考委員に選ばれるとすごく大変です。候補の業績のチェックから調査、提出論文の評価、比較票の作成など、膨大な作業が待っています。

選考委員会では、たいていは、まず公募要項を作って、教授会で了承されたあと、公募を行います。最近では、助教授も講師もこうした形の公募が多く、助手を公募することもあります。ともかく、医療情報部教授の公募が行われ、全国にアナ

ウンスが行われました。こうした公募は大学のホームページをはじめ、UMIN（大学附属病院ネットワークwww.umin.ac.jp）のホームページなど誰でも見ることのできる所に公開されています。

▼そして公募　書類に不備があるとアウトです

2001年の11月30日に公募が締め切られ、僕も応募しました。書類は履歴書や推薦状から業績目録、抱負など多岐にわたります。日頃から業績をまとめておかないと、こうした時にあわてることになります。書類の不備があるとアウトですから、公募に書かれたものをきっちりとそろえて、見栄えも整えないといけません。推薦状も誰に書いてもらうか、など、用意が大変です。僕は締め切りぎりぎりまで、いろんな人にチェックしてもらってから書類を出しました。

▼公募が締め切られると

公募が締め切られると、選考委員会が開かれて、まず、書類のチェックや資格があるかどうかのチェックなどを行って、一次候補者が複数名選ばれます。一次候補者の説明が教授会で行われ、了承されると、再び選考委員会が開かれ、一次候補者の中から絞り込んで二次候補者が選ばれます。この過程で、さまざまな調査をしたり、学外の人に意見を求めたり、追加書類を提出してもらったりといった作業が行われるわけです。

教授会は滋賀医大の場合、月2回しか行われないので、一次候補・二次候補と絞ってゆくには、時間がかかります。選考委員会を開いて、候補を決めて、教授会で了承を取って、という過程が必要なので、選考委員会のメンバーのスケジュールが合わずにずれ込むと次の月の教授会まで待たなければならないといったことがおこり、そのために選考が遅れてゆきます。年末年始や夏休みが入ると、その間は飛んでしまいますから、なかなか選考が進まない状況が生じることもあります。最近はできるだけ早く選考するようになってきていますが、それでも公募を締め切ってから最低2～3ヶ月はかかるわけです。

▼二次候補者が承認されると、恐怖の講演会が待っています

二次候補者が教授会で承認されると、その業績を数週間の間、公開する決まりです。この間に候補者による講演会が行われたり、選考委員によるインタビューが行われたりします。医療情報部の場合も、1月下旬に講演会が行われることになりました。さあ、大変です。「講演会で印象が悪くて、圧倒的に業績に差があったのになれなかった人がいる」とか、いろんなことが周りから聞こえてくると、とても不安になりました。将来、教授選に出る方は、必ず講演会の予演を行われることをおすすめします。学会の発表や、一般の方相手の講演会とはわけがちがいますから、まわりの親しい連中に忌憚のない意見をもらって十分練習しておく必要があります。僕は、学会発表でも講演会でも、今まで原稿無しでアドリブでやってきたので、予演には最初抵抗があったのですが、やっておいてよかったと思います。それでも、当日はすごく緊張しましたし、講演のあとは随分と落ち込みました。

▼いよいよ選挙の日

こうして、いよいよ教授会での選挙となります。一次候補者、二次候補者としぼってゆくたびに、教授会では選考委員長が候補者の紹介や比較を行って報告します。二次候補の段階や選挙の直前の委員長報告において、選考委員会としてはどの候補者を一位で押すか、についても報告されるのが普通で、こうした意見も参考にしながら、関係教授による投票が行われます。僕も2月から教授会に出ることになり、投票も行いましたが、助教授までは、事務の方が投票用紙を配り、記入が済んだ用紙を箱を持って回収にまわるのですが、教授選考のときだけは、投票箱が学長の近くに設置され、教授が列を作って投票箱に用紙を入れに行く、という方法をとります。

僕は、選考当日、学会で弘前に向かっていました。伊丹空港から電話を入れて、まだ選考が始まっていないらしいことがわかり、飛行機に乗り込みました。関西は暖冬でしたが、青森空港は雪の中。日も落ちて、空港バスで弘前に向かう窓からは、雪景色が寒々としています。僕は意識していなかったのですが、いっしょに学会に行った方々は、飛行機やバスの中では、僕がぴりぴりしていてとうてい声がかけられなかったと言います。バスが弘前市に到着する直前に電話が入り、教授に決まったことがわかりました。まわりはすごくよろこんでくれましたが、僕はしばらく緊張がとれず、まだ実感がありませんでした。

▼その後・・

2月から教授会に出るようになり、まずびっくりしたのはその人数の多さでした。席は自由で、遅れてゆくと前の方に座らなくてはならないのは学生の講義と同じです。すぐに助教授選考がはじまり、ずっといっしょに医療情報の仕事をしてきた5期生の杉本喜久君が5月1日から医療情報部の助教授に就任しました。同窓生の皆さん、気軽に医療情報部に遊びに来てください。秘書さんはいませんから連絡がつきにくいと思いますので、メールでいるかどうかを確認してください。メールは、nagata@belle.shiga-med.ac.jpです。これからも、時々、湖都通信に報告を書きますので、このあたりはどうなっているんだ、などといった質問も気軽にお寄せ下さい。

これからもよろしくお願いします。

Little Window

助教授紹介

（2002.6.30現在）

塩田直孝 （7期生）　島根医科大学医学部薬理学教室　助教授

1987年3月　滋賀医科大学医学部医学科卒業
1987年7月　吹田市民病院麻酔科研修医
1988年7月　滋賀医科大学医学部麻酔科助手
1993年3月　筑波大学応用生物科学系特別研究生
1994年3月　大阪医科大学大学院博士課程(薬理学)修了
1994年4月　大阪医科大学医学部薬理学教室助手
1995年4月　大阪医科大学医学部薬理学教室講師
1998年9月　Wihuri Research Institute（フィンランド）研究員
2002年4月　島根医科大学医学部薬理学教室助教授

切符の行き先はいつも空欄

自分の履歴を書きながら結構回り道をして来たものだとふと感じた。助手を辞めて学生に戻ったり、講師を辞めて国外に逃亡したり、未だに独身であることも含めて自分で心より納得した選択であった。縁がありこの4月より島根医科大学助教授として帰国赴任する機会を頂いた。最果ての地フィンランドより日本に迎えて頂いた恩を5年以内でお返しすることが現在の最重要責務である。マイナス30度のフィンランドの寒気の中で、見果てぬ夢を追うと言う人生最悪の生き方に自信が少し持てるようになった。夢の最終目的地である新しい世界に旅立つ前に、もうしばらく研究の世界で人生修業を積もうと思っている。

杉本喜久 （5期生）　滋賀医大医療情報部　助教授

1985年3月　滋賀医科大学医学部医学科卒業
1989年3月　滋賀医科大学医学部大学院修了
1989年4月　滋賀医科大学附属病院第一内科医員
1989年5月　滋賀医科大学内科学第一講座助手
1989年6月　滋賀医科大学医学情報センター助手併任
1997年1月　滋賀医科大学医学情報センター助手
（第一内科助手併任）
1997年4月　滋賀医科大学マルチメディアセンター助手併任
2002年5月　滋賀医科大学医療情報部助教授

平成13年度に省令で設置されました医療情報部の助教授を5月より拝命いたしました。セキュアで全ての医療従事者が恩恵を受けることが出来る病院医療情報システムを目指して開発研究を行っております。皆様の建設的な意見がシステムを成長させます。奮ってご意見をお寄せ下さい。また、循環器領域の医用工学・医用電子工学、不整脈の診断治療の研究も引き続き行っていきたいと思っています。と、堅いことを書いてしまいましたが、ざっくばらんモードで。学生時代コンピュータ部に所属していましたが、まさか、自分がコンピュータで禄を食むようになるとは思ってもみませんでした。コンピュータが文房具になった時代。もっと使いやすくがモットーです。

住所・勤務先肩書き等に変更がありましたら事務局にご一報ください

同期会の返信はがきから

紀田康雄（医・1期生）

小生が代表世話人をしている研究会の日と重なり申し訳ありません。岡本HSPでは10年間糖尿病合併症の疫学研究を続け、この分野では誰も到達できないAreaに入ったと思います。論文を書くこととチヌ筏釣りの事以外考えていません。

三輪正人（医・1期生）

来週の誕生日に運転免許を更新しなければならない方に、昨日泣きつかれ、急に今週中に白内障の手術をしてあげなければならなくなりました。金曜日まで手術がいっぱいで、手術器械と人手の関係から土曜日の午後しか時間が取れず、夕刻の宴会に間に合うことができません。20年ぶりの再会で、本当に楽しみにもしていたのですが、残念です。

米田正名（医・11期生）

本年1月より転勤になり、土曜日も丸一日働かされることになりました。（そのかわり月曜が定休日という非常にかわった病院です。）当日参加の可能性を調整しておりますが、今回の出席は難しいかと思います。卒後10年あっという間でしたが、健康で忙しいながらも順調に働かせてもらっています。この先も奈良の地で暮らす予定ですので近くにいらっしゃった時は、御連絡下さい。

中西健史（医・11期生）

大学院大学の教員ということで各方面からケツをたたかれており大変です。こんな患者の多いところでは臨床だけで手いっぱいです。母校はのんびりしていましたね。

古山雅子（医・11期生）

2001年11月20日に長男を出産し、現在は慣れない育児に奮闘中です。まだ子どもが幼いため、欠席させて頂きますが、会の御成功をお祈り申し上げます。

田畑富士男（医・1期生）

最近では医者か漁師かわからない日々を送っています。昨年の一番の大物は60kgのイソマグロでした。みなさん仕事で疲れたら御一報ください。

山本眞実（医・11期生）

昨年12月末に3人目の子どもを出産し、現在産休中です。10年ぶりの皆さんとの再会のチャンスを逃すのは残念ですが、香川県からベビー連れで行くのはあまりに大変なので、今回は失礼致します。

ご協賛ありがとうございます

日本アルコン株式会社　／　日本シェーリング株式会社　／　扶桑薬品工業株式会社
丸石製薬株式会社　／　帝人株式会社

（順不同）